

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第871号 平成27年1月29日

英語村

東京都は、昨年12月、東京オリンピックを見据えて10年後の将来像を描いた長期ビジョンを公表していますが、その中で、世界で活躍できる人材を育てる事を目的に、子ども達の英語力を高めるための教育施設として「英語村」を2018年度（平成30年度）に都内で開設する事を明らかにしました（平成26年12月26日付朝日新聞他から）。

報道されているところによると、東京都では、「英語村」は都内小中高の児童生徒を対象とした施設とすると共に、施設に滞在している間は日本語を原則禁止し、英語漬けの生活を想定しているようです。また、テーマパーク「キッザニア」のようにレストランや病院等日常生活の場面を設定し、その中で子ども達が「使える英語力」身に付ける事を目指すとしています。

韓国では、2000年代以降、自治体等が運営する「英語村」が各地に建設されており、語学力の向上に効果を上げているとされていますが（平成12年12月22日付日本経済新聞から）、日本国内では自治体が運営する「英語村」が実現するとすれば初めてとなります。

私は、このニュースに接して、内心複雑な感じを持っています。その理由は、私が教育長をしていた時に、「英語村」の構想をスタッフに話をしていたのですが、結局は実現に至らなかった事を思い出したからです。

私の「英語村」構想は、少年自然の家の再編整備に絡んで発想したもので、当時「洞爺少年自然の家」等6カ所あった少年自然の家を、利用者数の減少や施設の老朽化等を背景にその一部を廃止しようとしていました。そうした議論の中で私が考えた事は、老朽化した施設を単純に廃止するのではなく、その施設を日常生活から隔離した空間にし、英語だけしか使えない「英語村」のような施設にして事実上存続するという事を考えてはどうか、というものでした。

その発想の原点は「キッザニア」だったのですが、自然に囲まれた少年自然の家であれば、非日常の空間を造る事は可能ではないかと考えたところでした。また、ネイティブな英語の指導は、外国語指導助手（ALT）を有効活用すれば可能だろうとも考えていました。

私が教育長退任後の議論の経過は承知していませんが、平成25年度末を以て「洞爺少年自然の家」は廃止されたものの、他の施設はいずれも従来通り「体験活動支援施設」として運営されています。

北海道で「英語村」が実現出来なかった一番の背景は、厳しい財政状況にあった事に加え、私自身が「英語村」について強力で明確なビジョンを示せなかった事にあると、今更ながら反省しています。

東京都は、北海道と違い財政基盤はしっかりしており、先駆的に「英語村」を作るのは打って付けといえますが、今後、各道府県では、東京都の「英語村」の成否を見ながら自分のところにも「英語村」を作ろうという動きが活発になる事が予想されます。あるいは、民間企業がその分野にも積極的に参入してくる可能性もあるでしょう。

東京都の「英語村」が成功するか否かは、どれだけ中身のあるプログラムが用意できるかにかかっていると思いますので、今後の有識者らによる検討会での議論の行方が注目されます。

また、東京都の「英語村」の利用は東京都内の小中高生に限定されていますが、出来る事なら（相当難しいとは思いますが）、他道府県の小中高生にも開放していただければと、淡い期待を持っているところです。（塾頭：吉田 洋一）